

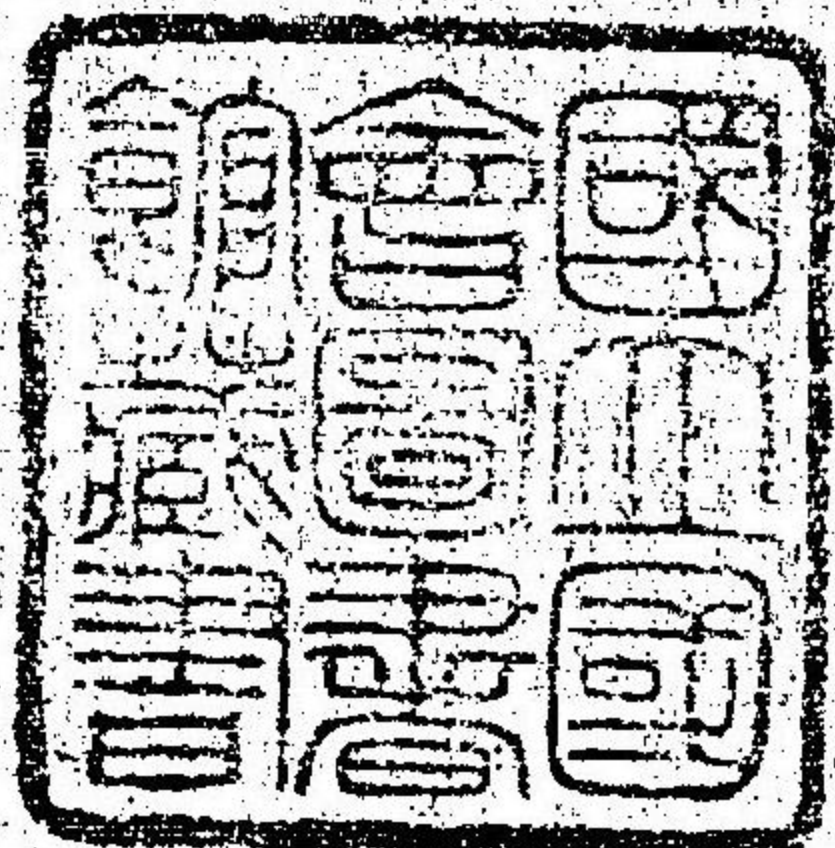
倭訓彙後編

幾久計古之部

六

813.6

Ta88/w



25806

倭訓栞後編卷之六

きの部

洞津 谷川士清纂

きうー 俗く九死一生をいふを離騷に雖九死其猶未悔と

きうゆ ○急死の音をいふにけり

きうま 胡瓜をいふ黄瓜の義あり又黄瓜をも訓びてふ和名抄

きうま 別種也 ○祇園の紋ハ菓ありと其氏子ハ胡瓜を禁じて
食せず神紋木瓜なるは取らざる事といふ又洛東智恩院の此
生石の下古ハ胡瓜を生じて其瓜を牛頭天王の文字にけり

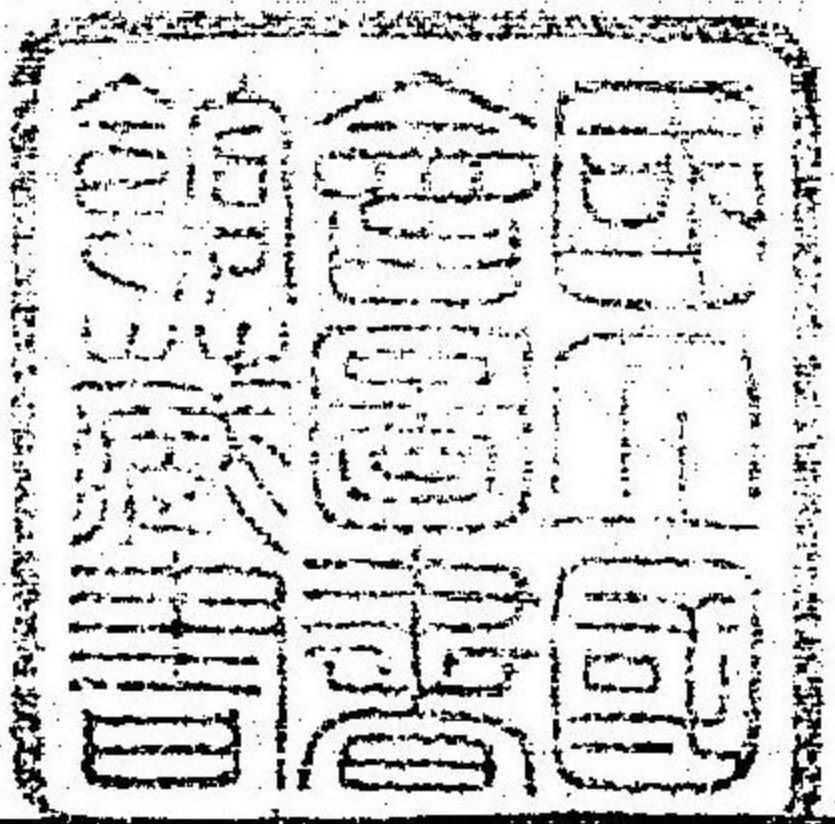
据ともいふハ信じてい

きうひ 求肥あえといふ葛粉糰粉をいふと合せて造るハ○浅茅に

きうひ 類也

きうとん 秦吉了也といふ西土の商人九官なる者来ると鬻

くより名くソんといふ同



△きこうり 枳柑とけり 枳売し似る木して實の味ハ九羊母の如し

△ぎぎ 食物本草の鱧糸魚と云うぎぎうともいふ湖水黒ぎぎあう其色黒一竿ぎぎハ尺餘と云いんがうぎぎハ二寸以下と云いぞ伊勢と云い土左と云い加賀と云いこのハと云い出羽の方言と云い奥州越後と云い越前と云いあつと云いもつうの嵯峨川のみと云い魚はぎぎの赤き也と云い海少と云い白黒のそと筋あうと云い○或説し享保十三年の味東國洪水の節此魚失く後鯰多く生じてぎぎの變ト云うものやふべいと云い

き 利といひ目きくろきく手きく足きくの類是之聞の義と同一

きくさ 蝦夷嶋く虫と云い北海隨筆と云いあり
きくそく 聞忌とのけり遠國に於て死去一月を経く聞つ

ふの類也

きくやうらん 桔梗蘭とけりけりらんの類也

きくすゑとく 鳥の聲と夜聞置く其所と符也と云い又雉の鳴と野山に聞と云い鈴の子と云いてあうやうと云い鷹と合と云い

△きくすひ 鶯と似る小鳥と云い漳州府志に鳴鳥也虫と云いハ農政全書の菊虎也と云い○参考虫あり人參と云い菊虎ハ似る

きくいんた 戴勝也と云い目白と似る小鳥と云い頭上ハ菊紋の黄毛ありと云い名く勝も作る花の事也

きくめいせき 菊銘石の義西土の書く石菊と云い○伊勢鈴鹿郡の石薬師ハ此石也と云い

△きくろむい 樵虫の義毛虫と云い蝶と化をと云い新六帖と云いんさう夫木集く木と云い虫と云い同ト云い

きこうらと

横筋違く條あつて鯛く似たり万歳をとも称を
こ雑戯く万歳とよもものりつてそんが眼く似たりとたり鬼目
魚也とつら眼赤く

△きらご

錦沙子也とつら蛸子の義もや中国くいなやら貝と
云肥前くこづらとよ

きらぐ

和名抄く蟻とよみ虱子也と注く酒蟻とよみ
とよりり沙虱とよみ神とよみ事大隅國風土記くん新撰字
鏡くハ蟻とよきららとよみとよ

△きくぐぞん

鬼子母神とよけり瓜哇國舊傳鬼子魔天与二
罔象相合而百餘子常啖人血肉とよみなハ鬼子母神と似たり
朗語訶梨圓滿具足藥又鬼子母也鬼子母之夫と五道天とよみ
是十羅之父とよみ実ハ乾闥婆也

きどやき

内く行事小雉焼とんん豆腐と二寸四方小さく塩と
つけ焼めて酒とわつ少くはくつら正月の式也

きーやぶふ

俗語也義者張の義あるべ

ぎーく

出雲く神在とよ江戸く大黃と云藥家穿眼と称
まら物真也片と称するハ羊蹄也とつら

きど

雉尾の義鳳尾草也大小あり一種救荒本草の銀
條葉ともつら花形虎の尾の如く薄紫也○ちさ品にも
長らはとよ

きーせん

庭訓往來く碁子麵とよけり碁子の形のぶとく
とよとよあるべ

きどか

雉匿の義野天門冬の矮生也大なる者とよち
とよとよ○木類くよ実赤くあつらつら

きどむら

雉筵の義小草く
雉羽矢也常人憚るハ天子の矢雉の羽を用ふ故

きどんら

虎耳草也とつら鬼神草の義あるべ

きぎょうらん

鬼女蘭をばー蔓草とて葉大きく花白く

さけり

△きりふ

令着の義を反す也神代紀に累もよるり○煙管

又烟吹とよふ蠻語也とらる京りきせり伊勢にきせりとも云其初ハ紙と巻たどと紙とて吸けり次く葎葎細竹等とてて用ふ羅山文集も他波古草名採之乾暴刺其葉而貼于紙捲之吹火吸其烟とんらる其端盛烟酒者称雁頭其所啣称吸口○種ハ鳥ハんつらとよふ烟筒をよふ烟筒ハ漢称也蝦夷嶋にてハせらんほとよふらんだぎせりハ全鉢すやきの物之今菌の類り名く土菌也とらる又草葎蓉也とよふ南蠻をふととらる

△きらり

古今集に林ちり野ハるにらりと隠せふ詠え

ハ桔梗の音也今ハきくやうとよぶらハ漢音きやハ兵音あり木の草ハ従ハ草の木ハ後ハ多し○澤桔梗と呼ハ浮菖

也とらる

△きたら

倭名抄に牛房とらる新撰字鏡と同一又き

きたのともよるり今ハ音派よるり又ららるさともよる馬路の義也○蝦夷ハ自然生の牛房にりて大さハ胡蘿蔔とまき多し○南海の濱り濱牛房と称らる物あり蔬として食ハ大薊の種也とらる山牛房といふハ高陸也薊の一名山牛房といふハ異まらすい牛房ハ羊蹄根ハ沼牛房ハ睡菜也

△きつねぐい

貝の状狐の如し

きつねのよせ

石松也とらる狐のたをたともよふ即ハいげのか

づらくともよる

きつねのわらわら

鬼蓋とらる

きつねのたまご

伊勢の安濃川にらる是土殷孽の小さきもの鈴

鹿山にらる真の土殷孽ハ志郡藤方り志州注連浦にらるふもの其品よるり種ハの形状あり諸州よるり出らる

きいの 古事記延喜式等々なる木名也

きばちす 倭名抄ノ薺と訓ゼリ木蓮と訓ゼリ木蓮と音取とてよふ物と異あり○今花肆ノ云胡盧巴也

△きぶねさく 秋明菊ともいふ秋牡丹也とソリ木船山小多

○木船ハ木生嶺キナガノをいへば式ノ貴布祢神社とありて梶取の社と二瀬村あり或木靈と祭るといふ大殿祭祝詞ノ屋船久違命是木靈也といふ

△きんこぶ 姓氏録吉彌侯部リ作ふ續日本紀ノ君子部と云是也

△きんば 菊薺の蠻語也とソリ交趾東京の風俗ノきんまの葉に栴椰子と刻きたると包て食は客人まは必器ノ入と出とよて二國との歯黒ととソリ又きんまハ蜜漬と云ると老葉薺と云あり○茶人のもていさぐ香盒ノきんまハと稱するハ菊薺と入ふ器ノ桂海志ノ此器出とと云金馬の字ハ用テ説造るハ非ズ

きんこ 海鼠の金色と帯とを称する奥の金華山より出

ふ也とソリ金華ハ海中の一島仙臺の良方あり此品をたつととソリ閩中海産録リ海參腹大如蝦蟇者名曰沙喫と

源氏ノ名細流ノ汝等ととソリととソリ君たつと

の義あり大和物語ととソリ外國の産近年渡来と状文鳥の如

きんこ 小鳥也種々の品あり

きんたう 俗語也緊當と書あり物物の價あぐ取即時に返

きんごご 金魚の音也本草ノ東坡錢塘詩ノ我識南屏金鯽魚ととソリ函史編リ通身紅如金曰金鯽ととソリ群芳譜リ三尾五尾七尾の者ハ尚ありとソリ此邦と同ト三才圖會ノ玳瑁魚あり班文ととソリ又銀魚あり今俗ノ錦魚とも書を

きやんらん 香椿の唐音也とらる俗にけりぬりの木ともらる香

椿ハ群芳譜にあり

△きよん 勢州明野の明星の茶店の清火ハ安養寺三世能信

百日参宮の時手づつら死者を葬て参宮と憚りし神夢の事

あつて宮中へ入りし清火の事とらるけり是洛東靈山國阿の

故事と一般して皆浮屠の私意より起る能信ハ外宮一の祢

宜後三位家行神主子也佛通弟子寂雲其弟子能信也

きよん 御忌とらるけり智恩院との稱するハ後柏原院の時

宜修法然上人之御忌との勅命にらる也

ぎよん 御柳とらるけり漢武殿前の故事と据ある一榎柳

也とらる近幸琉球より来ふ一年小三次花咲きよて三春柳と

と名つけり○謝肇淵云御柳とハ異らる

きよん 交椅とらるけり曲祿とらるけりまがら曲とらる正坐

とらるけり

ぎよん 玉海五十卷月輪無實記也初名玉葉良基公更名

玉海采の玉應麟が所撰也亦玉海とらる

△きらん 倭名抄に雲母と訓らる近江雲母珠仁明紀にあり

玫瑰と同じきらんとらる物ふれ名とらる城州のきらん坂参

州の言良と雲母と出らるけり名也今諸州より出らる五色の品の

は雲母の産らる山に極く石英あり石英あり水晶あり銅鑛

ありとらる○金雲母といふ雲母也多赤謂之雲珠多青謂之雲

英多白謂之雲液と本草にあり

きらん 龍牙草也とらる俗に地獄の釜蓋とらる○はる

草ときらんとらる

△きん 蟻とらるけり尔雅にあり也祢きんといふとらる

蟻とらる

きん 映山紅也とらる日向の霧嶋より出らるるとらる名

とらる諸縣郡霧島岑神續日本紀にありとらるの岑の靈牙と指

ふの如く然ハ肌ふまへん人をもてかゝ丸杯すまゝあてれさむき
と此哥ハ五句をまゝ古歌のふ宿て下の句ハ万葉集の下の句と
用られまふりかくはくを得られてハふづのくはとのとあれり此公ハ
自然の妙手はくつめもゆる人の猶及ぶる所之〇きりくすうふ
ハ神樂の名也

きりんちあり 麒麟場とけり葉の形状いぬぐの如く冬凋落せん

土佐の國とせん

きりふのこゝの 思のまゝの日記ときりぬの岡の千世のた光とをけ

きり言みあふとととんてきり

きりりてま 古事記と鑽出火ととる玉葉と神宮之習不用火打

用火切ととる名今きり火とり

きりふのすき 文のけか枝ととり截文の矢とりぬの如く又まね

の上下に黒班文ありて中間の白きふきうととり庭訓り筋切文

ゆ〇桐生の姓ハ東鑿とる名

くの部

くえんびこ 古事記と久延毘古ととる式能登國能登郡久底比古

神社同郡宿那彦神像石神社と云ととる氏と延と同韻通ず或説

り伊雜宮と杵筑宮あり大己貴少名彦名久延彦と祭るとり

くえんがた 漬垣の義山田の漬をとり垣をとりとる名と新六

帖り

小田田の稲ふととむるととんかこのあれまくとれを志のへとる

くくさ 倭名抄と鬼菟菜と訓をり日本紀所の名来と狭と

くくさ 辨色と成と鬱菟草ととるて延喜式とと此名あり

くくさ 日本紀新撰字鏡り鶴ととりとるの音を鶴と

名ありと今ととり呼ハ鶴之鶴ハ今白鳥ととりとる希と赤照

の者あり黄鶴ハ老白鳥也蝦夷ととるふちととる

くくさ 神代紀と菊理媛ととる菊ハあくの音なりと轉

ととるやとりとる非也古ととの音りとりとる肥後國菊地の

よきも亦同じきを看べー義ハ枯木の謂也所祭ハ紀劔熊野
加州白山濃州御嶽あり

倭名抄ノ蝟とよあり今針鼠と称ハ鶴ノ制せられ
虎を殺すくろく又狸ノ作ふ水戸西山公の時此物と来ー飛彈
の山ノ放てりといふ今舶来の皮とえりり大きき鼠の如くハけり
ど長と六寸ぐりありて毛針の如く

和名抄ノ蜀漆を訓ぐ今臭梧桐とよ臭木の義也
嫩牙食べー○黒酒ノ用ふ所ノ久佐木の灰ハ式ノてりたり○小
さ木けり常山也根を常山といひ葉を蜀漆といひ○とよ木此虫ハ
疳ノ妙也

四國辺ノ貝の鳥ノ化せりありてかき名く
とけり飛と一間ノ過ず其貝ハみふふといふ似たりとせ
草緑とよあり萬室全書ノ々苔緑といふゆりゆり
ろくく雌黄を合すと

とよがむん

草芍薬也とより木芍薬ハ牡丹也

とよぬき

倭名抄ノ野猪とよあり草居鳴といふや淮南

子と野鼠有九背槎樹といふたり

とよのいり

きりくすといふ此虫の類ノ竈雞の名ハ

あく梧をいふや昔の雞ともり

とよい

申海鼠の義海鼠と齎て後串ノ刺たり

とよか

新撰字鏡ノ麀とよ又いふと訓ぞり童蒙

頌韻ノ麀とより四方麀至といふ多く群集するものといふ

ゆ或ハ麀とより鹿ノ似て角をー麀の音とんあれがとんの鹿と云

あふと又麀とより羣に同ド

とよや

孔雀といけり交趾呂宋紅毛とよ来ハ蕭笛を聞と

たハ善舞もの也○孔雀草けり葉の形名の如く莖ハ黒漆の如し

とよとみド

櫛とみド也万葉集り

櫛とみドとみド櫛とみド櫛とみド櫛とみド

仙覺抄云人のものへあつきたる跡は三日八家の庭をめぐつて
櫛とえんぐとくりま事あり是吉の俗也

神賀詞より倭大物主櫛甄玉命と云ふ神代紀の
所謂奇魂の義あり又大物主神の子と櫛御方命はるまゝ古
事記よりえんぐとくりま事あり是ハ火の古語也

奇玉藥と云けり大江傳云治一切之血症之神方
也と大同類聚方よりえんぐとくり

△くぜ 救世菩薩ぶどとくろくハ具音也

△ぐそく 具足と云けり梵書より多くえんぐ○甲曹よりハ六具

満足の義よりハ訓と義通へり○具足の祝ハ鎌倉將軍家足
利公方より其式あり近世柳宮以下武家祖先より傳來の甲曹と
神と祭らるゝ剪勝野聞と軍法戦勝必祭甲曹と云えり
○長具足よりハ長太刀と小鎗ふせいの物也と云り又小具足と云
こととえんぐ略よりハ也○撰集抄云家の具足海人藻芥より人の家

中の具足徒然草何と云き具足と云くもくこのけりハ調度
より如り○三具足五具足ぶどとの称ハ床のぼりに云事あり

萬葉集にえんぐ倭名抄に細子草と訓せり具蔓
の義也今へとをわづらと云ハ女青也と云り

万葉集よりえんぐ糞鮒の義也
倭名抄に蠅蜋と云り食糞虫也と注せりけり

ししもやまごのむし如くしてちいさし芥子と蛭蠅之智在於
轉丸と云是也演雅詩に蛭蠅轉丸則賤糞合矣と云る○糞蛆
ともりふまごしと云り

昔膽の音あり龍胆と同じと云り古今集より
ふんハ別と云源氏もなぞしと云るびと云ふふとの名と云り

夏咲物と云若丹と云る牡丹の類也と云りおもひがけ
日本紀倭名抄に鯨と云り新撰字鏡に鯢と云
と云りと云り蝦夷よりゆき石やまこと出と云り又云る鯨也

了典籍便覽海翁音屈支羅と云々南齊書に出たる
 海燕も同じ種類甚多し蝦夷にあんべといひ紅毛語りともく
 まといふ○中原師遠鯨珠記あり崇徳院の時肥前神寄莊
 獻鯨珠一顆といふ夏百練抄みと云々○是大治二年の事也
 其珠水精を磨たら如し鳥珠子なるべし類聚雜要抄り鯨
 鯢玉一丸但件眼其代琥珀入之納錦袋と云々○せむ味佳
 也大あ者十餘丈り及べり○九尾の上の圓肥の所と尾箭と云
 鯨は尾脛中といふ是美味也一説しをなげと云々ハ尾鬚也鯨
 肉といふ鳥身と称するハ脊肉ありことといふとあり鯨は松前にて
 尻むろつといふりうんぞに名を名とつといふ一名をやら海と植鯨
 堅魚鯨のや鯨座頭と違琵琶下ふあり○渚ごとく潮ごとくた
 いふがとく逆まると長須鯨十五尋と云背下ハ背く白黒の班あり
 ○寄鯨といふ沙洲へ衝上り歸ると得ざ乾死する也こハ多く真
 甲鯨の鱗と逐來ふといふ○座頭と称するあり座頭の琵琶

と負さるふ似る魚背と疣ありて琵琶のぶとく皮と簀子皮
 と呼ぶと長洲鯨ありてこと疣あり真甲鯨ハ形色長大ありて大
 牙あり又ちやらぎうといふまをちの斬たる之をぬくりりりり
 とららさ
 仙人草といふ倭名也口草の義口に云るれハ齒落ふと
 ぞう又朽草の義ハ葉とめてす口く塗まは瘡を治す其痕朽ら
 ものなり○螢とくちららとくう腐草の化する意ハ○蝦夷の女
 ハ皆唇を赤く青くするらんる用ゆそ口草といふとて

とららさ
 梔子訓ど或ハ支子といふも口無の義其熟しても
 口を開くゆとて名つらるなり蔓とららなり花の千葉あるハ水
 梔子也小とらら又唐とららといふ○花曆百詠り諸花皆五
 出唯梔子六出といふ○哥にりるぬ毛といふも無口の義之○
 支子深延喜式り見も源氏とありとららとみらる禁男女着
 茜紅花交深支子色と陽成實録りるも○風雅集りりらら
 の色と流る川氷とよるるハ黄河とせらるる○碁盤の脚と梔子

の形く象く盤面と柁子してめりも助言と戒りたるも此ありと之
西土とも觀棋不語真君子の語也○徒然草にともありけりとい
へども木幡のけりけり柁子多き所也新古今集より

木幡ありふかぬけり口ありは痛うけりとも多入やハキキ

埃囊抄く毒蛇とよみけりハ腐爛の意たるハ蝦の訓

ありと云々

土佐日記くともけりともあひ出るとけり小き兒けり

なり今と土佐の浦人ハさけり灘邊の漁者ハ尻搔網とよみものこれ

あり

畫史より朽筆と云るやきき也

説苑く如以腐索御奔馬と云る古今六帖より

荒ぶ馬と朽き繩けりけりとも人けりとも

○和名抄く蛇とよみけり朽繩とよみ似るか之又蛇の帯に化して人
とたけり物けり莊子く螂蛆甘帯と云る注く帯ハ蛇也と

りり○きり蛇ハ銀蛇也又金蛇あり花形ハ白花蛇也又黒花蛇けり
あり蛇ハ藍蛇也水ともふハ水蛇也滑らともけりとも常ハ林
澤く居とも

唇弄とよみ唐人反ハ唇弄して反切も也

枕草紙く蛇苺也禁裡く五月五日蓬の露御

皿入ともけりとも十むけり小皿入硯蓋臺のせし出とも内
行事くともへびとも

狐とよみきつみの轉音也

究竟の音也とて究ハ吳音也今昔物語ハ屈強

ともんとも下學集く畢竟の義とも

鑣虫の義鳴声鑣ともけり如く聴耳兒是也とて

新勅撰集くけりけり田のとかくはれく假字たけり

杜鵑也とてけり沓直鳥の義也とて杜鵑の沓あり

沓直とてけり沓直とてけりけりけりけりけりけり

浅管村あり万葉集あり

度會の大河み人の若歴木ワカノキ久あは妹恋んかこ

一説く歴年の意してハコノハミ木とよむとハコノガ〇倭名抄
く釣樟ツリカもよあり藻塩草モシロクサくなくとぬぎとらる〇唐カラのぬぎあ
つと六月くまを結べり

△く麻 東國くと垣とよ伊勢くと畔とらる

△く麻んが 九羊母とまはど枸櫞木の音轉也とらる倭名抄

く枸櫞とわづらとよ今枸櫞の正音とよぶとの皆各別種也貝
原氏ハ柑とよ麻んがとらるはまを回く橋也とらる

△くハサネ 倭名抄唐韻と引く蝶桑トウサンとよとらる万葉集に

新桑ニイサネもよとらる

くハサネ 本草木耳の一名く桑黄トウサンは是あぶく桑に出る

猿の腰サルのウシは

くハサネ 肥後天草郡在木理と形状も全く桑あり

くハサネ 式城上郡く桑内神社あり桑内連舊事紀り名

△くびづか 倭名抄く大枷とよらる佛本行集經り愚痴之人

被其繫縛如犬着枷不得自在兵とよえたる俗く三界の首をせ
どりよ是也〇くびづかハ枷也説文く頂械とよる

くハサネ 日本紀倭名抄く水雞と訓ぞうとれど狹雞と訓ぞうし

くハサネ 来鳴の義人家く来鳴鳥あらはめて哥にとハサネはく戸
あどよあり靈異記く鴨と訓ぞう仲文家集く食菜とよせたる典籍
便覽くよ搗薬鳥と是あぶくとらる仙臺くとあまの鳥とらる

〇大小らるて小と黒鳥とよ人喜んく詠とらるものハ黒鳥あり大く
ひまらる鶉ウズ似あり雀とよハサネの如くハサネハ黒鳥あり大く
く隠るカクレとよて名く鶴トビハサネハサネ其形鶴トビ似あり又緋ヒメハサネ
〇鷹トビ詞くハサネ飛とハサネ鳥のとよハサネハサネ也靈異記り足
とハサネ鳥のとよとらる〇鴨カモ村ハ大和國平群郡也靈異記り足
とらる

とびあらし 洗頭池河内波川郡太子堂村より相傳ふ物部

守屋の首とあらしの所と云

△くぶんきき 口分給也俗に所謂扶持方と云也

△くまぞ みるくみとみづくとの間なる鳥也

と皮のうー 新撰字鏡に棋と云る古事記に葉廣熊檀と云

るくろり或はと皮のこめか義とも云

と葉のうー 若也葉に隈と云るあふらと云るやきだばくと云る

とくろり焼刃のゆきと云る義也よかひーきく用ふと忌と云る又

小熊著あり

とくろりぢら 葉細小くして夏白花を開く至小なり全躰ハ蔓也

とくろりどり 繪くろり曲と取也西土の画法にふ

とくろりたの 倭名抄に角鷹と訓ぞり熊鷹の義也熊ハ勇猛と称

とくろり之日本紀に熊鷹と云るハ是あふらと云る安永四年の春

角鷹闘いて伊勢一志郡八太の山に落て共死と角鷹ハ鷹鴉方

くろりの新撰字鏡に鴉と訓ぞり鶴ハいた〇矢に鷹の羽と云る

熊鷹と

と皮のうー 出入子に同一餃子也熊ハ子産くいまと云るんハ又

腹に入置もの之出入子の母の腹中に入ると同様あるゆゑ熊

の名と得るとあるかへー或ハ九分足と云る胎子の多きと云〇婚

礼に用ふハ易産及多子祝を重三の節儀と云るもゆゑか槍の交

りゆり也

とくろりぢら 熊澤に海樓晋書泰伯之後依浮屠之神像託雨

寶童子又檀為有三讓而証其窟謫憂死者不宜乎

とくろりぢら 日光山に多し蔓生の品馬鞭とすふ木也三儀一統

ふとんえんくろり豫州と云出

とくろりぢら 倭名抄に馬鞭草と訓ぞる六帖にみづくのとつ

トの岡のよまはげと云る〇新撰字鏡に根と云る心得の

とくろりぢら 〇熊葛練鞭靈異記にんくろり

と後とけらん 九枚竹蘭の儀とて高良姜也とて葉九枚
と及べ花はくくとて

△ごんごん 倭名抄に胡頹子とてよる一名と後ありとてよる式に
諸生と用ふとてよる夫木集に糖とてよる苗代とてよる藻塩艸
とてよる熟する時とて名づく菜莢と同一重陽日禁裡異
坤角柱結付菜莢の事雲圖抄建武年中行事とてよる昔
家文草に菜莢杖あり試むるたよるとてよる河内丹南郡に菜
莢木村あり○春とてあり半含春核とてよる山とてあり日とてよるか
つとてよる唐とてよる牛とてよる木半夏の種類をよる○
松寄生と伊勢にてまらとてよる

△ごんごん 群青とてよる繪具とてよる
ごんごん 齋宮群行ぶとてよる思の儘の日記に野宮煉の景
色むとてよる覚えたる事とてよる候とてよる
ごんごん 根津國有馬郡とてよる風土記に孝徳天皇為于

温泉宮為行宮採其枝於此枝木極美於是勅曰此山有功之地也
因名公智神社あり

△ごんごん 性靈集に美作國佐良莊とてよる久米郡也
△ごんごん 藿菌也とてよる雲草の義に
ごんごん 雲霧の訓也○草によると天蓋草とてよる花を紫
白とてよる

中山傳信録に壁虎魚也とてよる

△ごんごん 雲と樹むハ空ある事とてよる
ごんごん 古今集に墨滅とてよる雲の淡くとてよる發
とてよる栗田とてよる哥をいれを沫とてよる波の立田の
とてよる如

相模の方言本草浮石の附録に出と暈石に蜘蛛

△ごんごん 石とてよる
新撰字鏡和名抄に苦参とてよる大同類聚方同ト

坊とソウ

と後つご 倭名抄より白薇又漏蘆を訓じり黒草の義也○
同書く軒とより黒臭の義也今呼ぶものハ玄参也とソウ紫黄
青碧色の數種あり

とろとド

釣樟也といふ信濃くぢまやとりみ花ハつがもたの
らちふもの之よつ屋やとりみ可愛也とぞもなうこんとりみも同
類也樹色黒く葉茂まり實も黒く油く絞ふ北地のがんどおの
輪も是を用ふよて名とん延喜式卯杖をどん所謂黒木とや

とろとごい

倭名抄く魍魚とより閩書く鳥頬魚とより
或ハ炭焼ともりの又北伊勢とて黒ぢめともより

とろぢうハ

黒血川とけり美濃也顯家公の師泰と陣せり
所あり

と後つご あら

宇治物語り平仲平庭文女のゆゑ人行てなくま
祢とて硯の水と入るうとてろにらちて目とめくけら女心

得く墨と摺て入るうけらぬとてまこめく一まらハ女鏡と見
ててよらん

ワレふとてあれたを煮えんをれとも人くすろく教のけりきよ

とろどのと後

黒戸濱とけり下総あり

とろきとけり

古事記の哥く名黒御衣也黒衣服ハ喪服りて
義解くとり衣服令り人奴婢の服とて此ハきんぐんと
えろり上代より中昔までも黒き衣を着るる事物とて衣服の
色の制ハ隋唐の制にあたる物もぐり自らせくふ好尚とる所なり
とん○四位より上紫袍を改りて黒色にありハハと後世の夏也

とろとち

俗語也活字の音と呉音也といふ
火事の字王且カ神道碑とん

とんけんけり

唐土く雜貨と賣者手中に小鼓を鳴と其鼓
と喚嬌娘とソウ雜貨纂要よりん

とん祢ん

果然とけり東涯の書にんとり潔白雪のどく

尾豊ゆて長し夜眠ふ時を其尾に面を掩ひ卧と人々馴て可憐津輕より出たり其畜一人の家僕木天蓼を喰せり此斃まけふと尔雅に雖仰鼻而長尾則此あり

とてうち

廣知法印と稱す越後核馬場の山中に路あり飛瀑

岩く喘慶也廣知ハ奥州人高野山くのぼると欲し爰より至り飛泉より紫雲を生じるとんく実く堵卒也といひて入定たり四百七十年全躰不壞也と延暦の際日光山麓廣知菩薩といふ僧德行兼優也慈覺之を捨て廬山に登り傳教大師といふと蓋此人の終るに九百年過より倦遊雜録云花岳張超岩石下有僵尸齒髮皆完春時遊人多以酒瀝口呼為卧僂好事者作木榻以薦之と云云是相似多り又かんのの下にんくをり

とてふ

新撰字鏡に枕とよをり今もまんをりといふ美梨

子く似くひくはあり

とてぬ

倭名抄に烏芋と訓じり黒丸蘭の義ありと俗

ソとろくぐのぬとソソ土佐く黒くやくソ即やくのれ根あり

○白とろくかハ水慈姑也といつ朝鮮とよぶものハ其形隙也花

千重也花とろくハ剪刀草也麥ぐのハ山慈姑之土佐て凡てと

やとソ

とてま

榎植也といつ花梨の音を謬り取也○木理の美

をらにソミ即花梨の香櫛木也けやきの木理美あらは上とんと

呼と花とんより轉ぜふをて

とてら

源氏にきぬの色とソ今も萱草あり花鳥に藍

と蘇芳にたうと入て深ふとソ萱草と唐津ととんす信

州とてととソ○上田にソミを桔梗也○姫萱草はり小也

金萱也き萱草ともソ同種より前庭花と稱とあり蜜萱あり

野萱草あり花ゆりの如し

とてらん

花蘭の義紫蘭に似たり花色種にりて久しき

りたふ

けの部

けあー

氣悪き義

△けい

恠異の音也とらう○草くろくろを蕙之蘭花の細葉

の者とりまにららる麝香草あまらう○黄蕙あり梅蕙あり星蕙ありらる蕙らうともく紫蘭の類也

けいと

雞頭の義雞冠也とらう唐と称する品はらうとん

えびいとハ雁来紅也一種の葉けいとあり花ハ常の雞頭とて葉の紋形らるるぞう○西土くろく雞頭ハ水あまら也○野雞頭ハ青箱一名野雞冠也とらう○とんやらと称するハ掃帚雞冠也

けいこういん

伊勢あり開山周悦上人文明元年の草創也

陽成院の御宇慶光院の文字と宸筆とて賜ら其神宮ハ於て正しく造營の神忠大功ある故とてあり周悦上人ハ紀伊人あり

けいもんまけとく

佛工藝文會誓主勲の訛称也事ハ大

和鏡より詳也

△けうがひ

校合とのけり書寫ものを彼と此と相校へ合す

あり

けうやく

源氏より名交易の音也とらう

けうやう

交名をよりり東鑑よりんえうり今連名とらう

きんど歴名とりし事ありて名をかきふとらう義より人の名は残らばうたるとたる物之其内より撰り出してサく書奉たる物也とらう○庭訓往来より徴使定使給分交文充文とらう夏人名交文を數人と書のせ充文二人と書多ありあべり○内裏式に大臣進宣命文侍從見參及文人交名とも又進見參侍從交とも見えたり又同式より賜可叙人歴名於内侍とも任官式より式部兵部等給歴名且ともんくもんじよりいふが如くもあべり事よりて名目のかりふちるべり江家次第除目の條より歴名帳と見えゆこ八上卿のひえあはひめて交名書替たりとや上奏より歴名と

書をよりハんあてらう神官の正權祿宜の歴名帳毎年祭主へ進

ふも交名と書来たりともとらう江次第の夾名も同よりきりや

△けんか

伊賀人かたはけんかともかへ反け也えハけの響也

△けぎ

俗よりけぎのよたりきりぐり之外儀の音あり

△けこ

華宮法より法事とらう

△けり

栗とらみ芥子の音誤謬祿せりあべり○野け

ハ白昔之○けり坊主とらみ俗語ハ本草より罌在花中鬚葉裏之を

り鬚葉の意也○阿芙蓉ハけりの志ふ之花を米藪花とらみ

けり

東國西國ともく雜穀とけりねとらみよと米びつ

けり

げり

蚰蜒とらみ毛蝦の意より多くハ鼠糞の化せる所あり

○俗よりけりくろぶとらみ類ハ病源候論より鬼紙頭也○梶原

景時の諱名とけりくろぶとらみ諺あり景時の音はとらみあり東鑑

よりよかに此人義経以下數人と詭訴し終り身及子孫を亡とらみ

まう天譴逃ぶべからざる事なり

△けせん 牙籤とのけり象牙にて小札を作ふ書を執りて

外題と書て帙外に記して見安うするむふやうにせむなり

△けをれ 婦女の用たる剃刀の小ある者なり

△けだん 銀坑の悪風なり石見の國銀山ありと云う

△けつたん 血判の義之近代誓状に血判をハ枕書に剥皮為刺

注し鬻指表至誠為其為約誓に据あふべし○血書ハ比叡山之

家破戒の難を蒙りて時其難を脱せんと欲して牛王に血唇

て神明に盟ひ縁也

△けちちたう 交竹桃と云けり群芳譜に名花赤一八重

あり一重あり近年渡來より梵書に竹を交む桃と点せハ誤也○

鳳儷花とも交竹桃と云う

△けべ 貞徳が書にまてつきよの下より今けんへいと云う今

北伊勢ふどにせむ事之十二づけとて小児の歌ふるゆゑと云ハ
一ッ事あるべし

△けやう 假名也常に假名實名と云う是字也凡平生人々

對して称呼する者也又俗名と云ふ

△けんぞく 眷屬と云けり姝宗玄義に親愛故曰眷更相臣

順故名屬と云う

けんぶん 檢分と云けり内外宮式年遷宮調進の證文より

けんめん 棟麩と云けり温飽の如きものあり小麦粉を鶏

蛋汁とてみぐり長さ貳寸ほどに切て楮の細腸木耳とつまう

淡醬とて煮るなり

けんちん ちりぐりに用る料理の名也油あげの品あり巻煎

けんどう ちりぐり

けんどう 源氏草の義一種の花草也

けんほのふー 枳棋子とつゝ玄圃、梨江南橘と對せふ故めて此枳

の名によらるる故一又世俗に玄圃の梨和活が柚對稱すとめて梨の類
柚の類にあづる和活が柚ハ揚梅に似て熟して黄色也金剛果也

けんよとふー 權輿無の義とつゝ詩の注に權輿ハ始也と
んくさう

けんこんづの 兼好塚と誤て乾坤塚とつゝ下馬陵と訛て蝦

蟻陵ともつゝ同日の談之伊賀國種生村國見山の麓にけり此處

に住せり寛文の始に土民塚とあづる奇恠あり事伊水温
故にんくさう

△けり 万葉集にけり西土少毛桃とつゝり

△けやき 本草陶弘景が所説の擗也概と一類とく良材なれば

貴木とつゝりや又つきばやき石げやきなどの品あり

△けら 山城の八瀬にけり自稱にけらとつゝむらとつゝが如し

けら 倭名抄に螻蛄と訓にけり京にけりらむとつゝり

けらオとつゝハ荀子に梧鼠五技而窮とつゝ蔡邕の勸学篇に碩

鼠五能不成一枝とつゝ梧鼠と碩鼠と螻蛄の一名あるとめてけり

魏詩に大鼠の事とせり山谷に五伎鼯鼠笑鳩拙とつゝり

田鼠と碩鼠とつゝ野食と鼯鼠とつゝ山谷鳩に對しけり据を

ハ此諺ハ野食の度あるとつゝやその譬ハ石白藝とつゝ類之〇俗に

むけりとつゝみ凡ての虫類を指の辞とつゝり〇鳥とつゝハ日光

出にけり大さ鳩をむけりとつゝり又とけりけり略けりつゝきり似

て木梢とつゝるむけり〇桐の類とつゝり一名木綿桐其

實の房をなしてさがるをめて名とつゝ江戶にむけりせんごんご云

つゝりとは是あづる蜀梓とつゝり〇禮の内則に螻蛄魚と云

こととつゝり醫書に螻蛄の氣に痘疹の兒觸むハ悪くなると

つゝり〇土佐長岡郡介良朝岑明神あり其祭にたいさうとつゝ

もの出と老若とつゝ婦人也行事ハ三人童男也臺として往來を

この部

こあつひ 錦葵也と云う○大和錦の名とこあつひはう御引

直衣の文と云う

△ごうき 宇治拾遺に教議と云けり

ころうー 倭名抄に犢と云うり日本紀にうーの子と云うり十

二角犢と云名紀畧に兩頭犢と云の續日本後紀に三足犢と云中國

東國とも云べことと云四國と云のことと云

ころうぢん 東大寺正倉院の蘭奢待ハ聖武帝名附たまふ初ハ黄

熟香と云今重と三貫五十目あり大紅塵と云重と四貫六百

目余にら名香同藏あり此と奇南の極品也

ころうはと 蠻名也代赭石の類と云色黄赤

ころうろうさう 紅黄草と云けり花紅と黄と云

ころうあんまゝもい 梅の異名と云又一種の品と云呼と辨慶と須磨に

て此花江南所無也一枝於折盜之輩者任天永紅葉之例伐一枝

可剪一指と制札とまゝよりとふなるべし陸凱詩折梅逢驛使
木の櫻とくたふくつふを謬なるべし

△こえ 糞培とよみやうともつり肥と義通なり○通鑿後周紀

く杼厠行と之入注く取人家之虎子馬法穢惡洗之者也と名杼厠
厠ハこえとりの類行とハハ食の類也○こえつがハ居家必備る厠
甌とスル○新撰字鏡く塙とこえつらとよむ塙とくスルなり○

越ハ本道路一條の名直越不盡越の類是也

こえまつ 松の脂ある所とよみ千金翼方く肥松木節とスル

こえんふ 源氏枕草紙くスル五葉之五針松とよみ又攢針松とよみ

ゆ○霜うつと稱するも五針松とて葉に白く霜のうつふける如く粉
ふける

こえんどろ 鹽苺子也とソリ蛮名とて蕃人常食とん和名こ

のー

△こがらす 平家重代の寶小鳥太刀く大寶二年天國と銘り

此後八年月姓名と鑄り夏令くスルなり

こがら 今上り行幸とソル上皇は御幸とソルもと三代美

録まぐハ其まらスル西宮抄ハ分てうけり其比よりの称も

こかふー 雪梨とよみ肥前高来郡の空閑の産とよみ名とせらる

とソラま丸く色さ赤ー○世諺くあつてとソル事ハ婚嫁

とやーとてつてぬらー事梵書く出て我邦の俗とあり後ハ

ハこがらともうハ嫉とて子ガをーの義を取らるより起まりとソハ

つ胎婦く梨子と忌て食りてはらと亦同トミル本ハ子瓜らむ

事とありとソラとよみ梨子とら常盤堅磐とソルひて飛礫

とやうたらちるべつとての條考合とへ

こがのき 新撰字鏡く櫛とよみ今船のせきに用ゆる材之

こがらせ 小鳥の名あり山がら四十がらめなど類と同トラうせ

ア小陵鳥と書ハ山がらと山陵鳥とすよりソカ也埃囊抄く

鵠下學集一鷓もに心得ごころ夫木集一

汝方の底くはらこころ兒ハ時雨くなのく木の葉となり

○料理とこがくはくとあり

ここのく 袖中抄く鳥のさくと鳴となり万葉集くここの

とどくもとあり

こがひ一 金龜子也とつつ大小種あり筑紫くぶと肥

州くあひぶくとなり

こが祓のせたのたふ 撫兒也とふふ金錢花の名既し倭名抄く

んてんせとあり吳音也夫木集一

拂あをぬ葎の下にかくせと令の後のたふいやはらなり

此金錢花ハ一名子牛花なり者也と又となりなり今

金錢花と呼ハ金盞花也となり○銀錢花あり安柘葵也となり

こぎふ 物の價とこぎふなり小切の義あり一一狐疑の

義とすハいのど

こぎのこ 羽子となり見女の戯具之羽根こぎとなりこぎハ

漕の義となりつとなり同トきヤ木ノ樂子に鳥の羽と植と

板となりちはら也世諺問答と稚きとの蚊と喰まぬまり

あひ之蜻蛉ハ蚊と喰ム虫ハ蜻蛉の形となりつとなり古

今注く無患子の事と書して昔有神巫能符効百鬼得鬼則

以此木為器因以厭鬼魅故号曰無患となり無患子ハ木樂

子と同類の功ありとなり此弄器と造りて胡鬼子と名あり

あらべ一となり○木の美の名によぶものハ都念子也となり

かの羽子と似たりとなり名くよき常州筑波嶺

より出るはせり賞せり江伊となり羽子の木となり後水尾院

御製一

んのごとなりハゆとなり此の名今有のをんすあり

美濃のいりの兒戲とこぎのこはつくたなりと唱る詞あり

つ能まりとなり○伊豫と耕作の時用る布となり

とよ小着布あぶら

こぎりろ 繭鼠の名りよる小碾とり義之廿日鼠ともよせ

日の内く長すゆめて名とんとつ

こぎやう 七種の菜にろう公事根源拾芥抄かごん御形

作ふと埃囊抄く五行く作まう本草に馬齒莧一名五行草

とんくもりとれ正月の比ふ此草いまごりく鼠麴草を云五

色それくか草也とつ

こくろ 思の儘の日記く將軍造國司うけたまはつて西園寺

大将奉行す

こくろ 俗くろうこくろ木て鼻とふろかなくとつふとつ

とんい詞あぶら

こくろ 小串とこのけり庭訓往來くえも小笠懸ハ檜の板小

てゆり側て串小挿と地くまくとつて是云あぶら

こくたん 黒檀とけり烏木也とつり烏木ハ琉球く出てとろざ

とつ

こくぼう 俗く米虫と名らハ穀倉院より出ま詞あぶら穀倉

院ハ大學の西くけりて豊射坊之象鼻虫也とつ

ハ穂日命四十八世孝時三子けりて嫡子清孝子二男千家孝宗

継神火而後三男北島真孝継神火以降千家北嶋交継神火及神

水先國造身退則正衣冠供飲食如生存後國造嚴威儀自大門

出到大庭社有継神火之儀節祭祀事訖告大社其間行程十里聞

之前國造屍自小門出之送之瓦甍後無問後國造入自大門整威儀

食酒肉宴飲歡樂罔忌服之制是則穂日命神靈不滅不亡而歴く

存留傳世く之形骸耳

こけ 松の白こけハ艾納之錢こけハ昔錢之あこけハ石濡之杉こ

けハ士馬駿之花こけハ石蓋之青こけハ垣衣之蛇こけハ過路蜈蚣之瓔珞

こけハ地柏之豆こけハ豆と割たろ如く

こけらと

昔衣ききとる巖ハすのろんきぬきをゆみ帯びたるが

江談抄にも白雲似帶圍山腰青苔如衣負巖肩九中詩と云く
たうまひ路ハ間廣也全浙兵制よてさむうごてとあり

こけごみー 越後こけかこせとくひりく篠竹はるの背のぶ

とく造つて掌に納れ稻とこけー小近世鉄めて制たる便利の
もの出来ーよう名也又やとのとよひ

こごぶく 又金剛ぶごともひ雀ぶご同ド

こごり 鮭年魚ちとにりう延喜式り内子と云る

こごり 文徳實録有鳥集殿前松樹俗名古く鳥其鳴自呼

とんくさり

こころあき 俗語也心鍾の義をぶー神代紀く鍾憐愛と云く

こころあきとくさりハ心あきとくさり○心あきとくさり三部抄に云く

ハ心あきとくさり類の辞也

こころあきとくさり 三條院こころにもあきとくさり浮世と云くハとくさり

後拾遺集く例あきとくさりまて位ちとくさりと云はる

月あきとくさりと云はる御覧してと云る榮花物語くかて帝ハ猶心地

と云きとくさりたのらまきかたつと云はるりく内出と云く

き河口とくさり事に云はるいへ給ふ云くかくて内造りとて

十月小つとくさりと云はるて日比かりまんがく御物

忌の日皇后宮の御湯殿つとくさりと云はる其出来

たる内やと云くようふと云きとくさりと云はる

きて入るゆと云く一月まにあらと云はるまのあはるは是とつけて

と帝世の中はと云くはる事と云はる

と云くはる事と云くはる事と云はる

と云くはる事と云くはる事と云はる

と云くはる事と云くはる事と云はる

と云くはる事と云くはる事と云はる

こらふいりもきりやえをにあらむこせつぶとく

△こらふ 毎字とよみつてよりかきてこらひ也つ縁ゆきよりふく意同

こくとり 万葉集より許等乎呂波敵てとるるハ助辞也

ことあしとら 志のふ草ことらうはれど六帖くあしむらげとら

枕艸帑にも別く出とらうけきまきとらふもやとらふハ物忌をつ
けて簾冠あどけえさむとらふ(茶べ)

こつとらゆき 小鳥不舎の義漢名と鵲不踏或ハ百鳥不泊と

つうたらしもいふ木也○虎刺とも名く又あうこらうとも又阿蒙

△こらふ 陀木ともらう○小藤あもよらうめきともらう

△こらふ 木末のあわれはうと通也

こらふのこら しの崎りよと合せらう万葉集くも

△こらふとら 木葉の散るるが時雨くうらまらふとらう木

葉の雨と同一陳葺芷が黄葉詩く夢回歴く雨聲中窓形分明

曉色紅出戸方知是黄葉更无一片在梧桐

このてがしと 万葉集より兒手柏とけり是ハ榊の嫩葉の乳

兒の手掌に似たるとら也一種奈良とらふものハ犬がくは後

人万葉集のあらし山のこのてがしとらとらにようて別種の名とを

ふとられもあ葉集より兒手柏両面よとらう出とらよとら両面

ともよ西土に佛手柏の名あり上品と千手とよらう本草徴要ハ千

頭柏ともよとらう○住吉このて柏の神供とらあり榊の葉は

用とらとら賀茂くよめるハ榊あし一建保百首り

○松ともとらとら大和の俗にいらとら也

武蔵野の小薔のこのさやとらこのさやとらの花の上さ

△こらふ 倭名抄く撲とよらう木皮也と注せり俗にこらと云

ハ略也○小魚の名とよらう鯛の子とらハ非別種也其形撲く似

とら京とらとらうとらとら

此寺始行之法也

こまぎ

胡麻木の義葉の香炒まる胡麻の如し賣子木の類かま
とみの木とちぢりも同類也とらるる○僧家より護摩木の天合異
産考く木麻高丈餘葉似胡麻故曰木麻山僧伐木麻為護摩薪と
えり胡麻油とらるる意同く護摩の音よりなるべし

こまぎ

新撰字鏡に櫛とらるる字訓も心得る

こまぎ

星貨の類也○こまぎのうりて貨身といふ○雜貨と同じ

こまぎ

其商以手中に小鼓と鳴して人とあつむ其鼓と喚嬌娘とらるる

こまぎ

倭名抄に狼牙と訓じり山豆根也といふ又駒繫の
義駒の好く喰草之根莖つらして駒をばらぐべしとらるる藻塩草に
女郎花多し所との約はまゝなん人や引とらるる

こまぎ

木間把の義也とらるる木葉のきとらるる
河内の地名也倭名抄に紺口とらるる神名式に咸古とらるる

仁徳紀に感致とらるる

こんひら

讚州象頭山ハ毘比羅神を祀ふ其像座して三尺餘僧形也
とらるるき面貌也今の修験者の戴く頭巾と蒙りて手羽扇を執り
冥感靈驗ある事響の如し闇夜海路を迷ふ時ハ此神を念じて其着
岸を祈ると必一團の火現る毘比羅ハ高松の西南海に近き所也白峯ハ
崇徳院の御廟あり今と亦鳴動す○金毘羅王ハ觀音二十八部衆の内
の名也

こんきく

紺菊の義管さきの一種あり又近き比一種の紺菊はうて花
の色甚濃艶也こハ所謂藍菊也とらるる今朝鮮紺菊といふ本草の馬
蘭月令廣義にうみ五月菊とらるる○俗に馬蘭と称する者ハ万
情に似たり花土中より咲くと馬蘭と謬ると音に訛ると呼ぶと
こんぎく 魚の名によらるる祝ふも用ふもの也根津志に淡壓獨
魚とらるる大諸礼にちいさたむの事をうとらるる
こんろんさう 崑崙草とらるる花びら四枚づ出てあつたり咲て色

白

こんりうせいりう

捨迦羅制多伽因中一字也或云香迦羅是忿怒
面而降伏於魔也制多伽司善也起上慈悲本地大日訶梨帝母金剛
童子金剛界胎藏界两部也

△こめあ

未菜の義細草也春白花あり

こめざらう

櫻に似て甚小也○粉米櫻と云ふ又別あり

△こめう

財産ふとをさうて私を盗むと云ふと云ふ虚妄の字
と用來しう虚妄とて竊むと云ふあり

ごめく

五木湯と云ふハ桑槐桃楮柳之庭訓に五木ハ草とい
つり和名抄に煮くとハ外の湯藥の如く服するや治脚氣と
つり○こめく處と云ふと云ふみかくの義みか反も

△こやー

糞培と云ふ西土と肥水と云ふつり或ハ牛馬の骨を焼て
灰汁と云ふしてこやーに用ひ大豆の油を絞ると云ふ粕と云ふ用ひ豆餅と
名けりと云

こやま

子安と云けり易産の義也○子安のまゆりハ神佛の符
と云つり○倭名抄に鳶尾と云やまと云と訓せり○子安がハ貝
子の俗稱之竹取物語にもつと云うものも云やまの貝と云と云
まど本草に鱗貝使入胎消勿示孕婦と云と云つり阿波にて稱する
ものハ別種也○子安の木ハ筑前宇漕の宮にあり神功皇后の御産
の時と云すつとせたまふ木ぬるつり言傳へるとこの木ハ槐之東引の
槐樹と手小把て産し易しと云ふ本文ハ子母秘録にも云つりと
つり一種花と葉とちと木に似るとも稱せり保命歌括の慈母
枝一名平産樹也と云つり産婦以此樹造梳或以花挿必平産と云え
るあり

こやそぎ

醜醜花也江戸と云きんぞと云又ぐん花西國に菊い

なつと云

△こら

俗に神樂所と呼ひ御子良と云つり神供と奉ふ殿也是
ハ天鈿女命より事起つと云ふ○伊勢の子良鹿嶋の齋ハ月のさハ

子知らぬ少女之嚴嶋の内侍ハ年老までも仕へ侍らるや

△ごつと

石點也とつらう○木曾の谷川など諸木の枝の腐たるを

ごつ木とつごつハ此朽木の化せることつらうをぬくかふものと思
しともつ入その事魚史ふと出らうとつらう○近江の湖とてハぎ
がごつ又ぎしりくともかきれともつら真黒鳥ぎしり鯰ぎしり
ぎしりちどの品つらとつらう○加賀とてはうえんごつとつハ麴條魚
とてう魚の小さきものあり

△おれやこの

万葉集に此也是能とくけり也ハ音義和語のちみつの

ら出會えたる也物あつらつらる時の辞也又やハトとかつら伊勢物語にこれ
ぞこのとくえると同ド本は天月とつみ末は年月の月に移ドたう
○別まつてぬふれとハとつら本ハ誤也○まらうつらぬふきも一本にありと
あふはらう○蟬丸のちハ別まつてハ下の逢とつみ詞中を配うて意得らハ古
の一格也別まつて逢つとつみふハ用ひざらう

△ころどろ

鷹の面々に一羽つて鷹とさるとつらとつら獨自とさると

りみれづる

△ころどろ

下臈のきふづつとつら物とつらとつらとつら

倭訓栞後編卷之六終

